

本音の コラム



「拘置所に面会に行つたのですが、『おれには姉などはいない』と言われて帰ってきました」と袴田秀子さんが嘆くのを、なんどか聞いていた。

二年前の三月、静岡地裁の村山浩昭裁判長は死刑確定囚・袴田巖さんにたいし「これ以上、拘置を続けるのは耐え難いほど正義に反する」と刑の執行停止を宣言、四十八年ぶりに釈放した。

裁判官の決断は輝いていた。テレビでみた、そのときの秀子さんの笑顔は素晴らしかった。それまではいつも、固い悲愴な表情だったからだ。

釈放されてからの、袴田さんの生活を記録した金聖雄監督の映画『夢の

かまた さとし
鎌田 慧

人間は素晴らしい

間の世の中』のなかで、秀子さんは弟の表情を「まるで仮面をかぶっていたようだった」という。死刑確定囚はいつ処刑されるかわからない存在である。袴田さんの拘禁反応が激しくなり、精神的に現実世界から解離し、死刑のある国家と対峙する存在と化していた。

袴田さんの妥協しない構えがすこしずつ柔らかく溶け出し、秀子さんもよく笑う女性になっていくのが、撮影を重ねるに従って感じられる。

拘置所にいた長年の習慣から一日中、家のなかを歩き回っている弟は七十九歳、世話をしている秀子さん八十三歳。わたしが訪問したときよりも、さらに明るい雰囲気になっていく。まだ検察は抗告し抵抗しているが、人間的に恥ずかしいことだ。(ルポライター)